

三陸の近景

⑮

冬の訪問活動

この季節、目を覚ますと窓の外に銀世界の広がる日が続きます。日照率の高い太平洋沿岸部では、朝日が雪に映り、すがすがしい気持ちにさせてくれます。

一方で、冷え込みは厳しく、外に出るのがおっくうな気持ちにもなります。私たちが仮設住宅を訪問していても、敷地内ですれ違う人はめっきり減りました。

先日、訪問先の女性が開口一番「冬はいやだね。暖かい時期にはベンチで話をしたけれど今は誰も外に出ないし、会わないよ」とおっしゃいました。

立て続けに「玄関横の街灯が消えてしまい、暗くて怖い。仮設の耐用年数を超えているのではない



か」「一体いつまで、ここに閉じ込められて過ごさないといけないのか」「いつになったら、元の暮らしに戻ることができるのだろう」「ぜいたくを望んでいるのではない。できるだけ元の暮らしに近づきたいだけ」。

時間が経ても解消されない種々の不満を吐露されるのを聴き、こちらの胸も痛みました。

その方は、今から外出するということで上着を着込まれました。その際に「この服は支援物資だ。支援物資は大切にしている。思い出が詰まっているから」「こういうことを人に言うのは何かうれしいね」「ここを出て引っ越したらお客さん1号になってほしい。来てくれると元気になる」。

見ず知らずの人に支えられてきたこと、人と話をすることのうれしさを伝えてくださったことが印象に残りました。津波で住宅を失われた多くの方が、仮設住宅に移り住まれて3年を超えました。震災後4度目のお正月を迎えられたことになります。着実な復興が窺えるニュースも増えていますが、人々の気持ちの面は厳しい状況がまだまだ続くと感じています。

それでも出会う人々との関わりに温かさを感じつつ、訪問活動を継続しています。(本願寺派総合研究所研究員・金澤豊)